

比較方言学の方法に馴染まない「つるべ」の アクセント地図に関する社会地理方言学的解釈

江 端 義 夫
(2000年9月30日受理)

A Social Geodialectological Interpretation on the Dialect Atlas of "Tsurube", a well bucket,
which is not suitable for the Method of Comparative Dialectology

Yoshio Ebata

This paper attempts to prove the proper grounds of the Social Geodialectological study on the word atlas of the accent in Japan. We should discuss positively about the word-accent atlases in future, although the comparative dialectology had been maintained the systematical method for a long time.

The following 4 points are discovered:

1. Tsurubega, as the Tokyo dialect accent, has covered over the Central Japan since 1960.
2. Tsurubega, which is a special accent, has been increased suddenly among the youth since 1980.
3. Because we became not to use the "tsurube" in daily life, the youth had confused the name of the comedian with "Tsurube" as a well bucket.
4. Tsurubega, which was different from the big two accents of East and West Japan, happen to emerge according to these complex reasons.

Comparing with the dialect atlases of several decades, we can promote to study the accents geodialectologically.

Key words: Social geolinguistics, Social geodialectology, accent, comparative dialectology, dialect geography.

キーワード：社会地理言語学、社会地理方言学、アクセント、比較方言学、方言地理学

はじめに

(1) 問題の所在

W. A. グロータース神父が「千葉県アクセントの言語地理学的研究」(1976年)を発表され、アクセントについても地理学的な討究が可能なることを示された。その中で神父は25枚もの地図を使用され、しかも32語の分布を類型化しつつ、その新古を慎重に追求されている。母音の語音環境にも配慮されている。また、金田一語彙の類別との関係にも言及していらっしゃる。

しかし、このような方法は、言語変化の方向が単純すぎて、比較方言学の方法とそれほど変わらないと言われるだろう。もっと明示的な方法としては、同じ集団内の老年層と若年層との比較ほど、明瞭なものはないはずである。このような「層序方言学」がきわめて有効なことは、以下の言語地図で明らかになるだろう。日

本では、複数の年層にわたる苦勞の多い方言調査がなされてこなかっただけである。そのためにこの方面の発展がなかったのである。

ところで、Georg Wenker は、音韻法則の実証のために方言地図を作成したのに、逆に音韻法則どおりのきれいな言語地図が一つもなく、全部がバラバラの分布であることが発見されたと言われている。1887年のDSA(ドイツ言語地図)は言語変化が体系的にはなく、個々に行われるということを実証したヴェンカーの一大事業である。また、同じようにミツカヤシュミットのDWA(ドイツ単語地図)においても、分布の一致するものは皆無なのである。つまり、法則的には個々の語は変化しないということが常識となったわけである。

さて、マイクロで言語変化をとらえるのが地理方言学であるとすれば、マクロで言語変化をとらえるのが、比較方言学だとされる。二つのものがどのような関係

にあるかということ、まだ明確にはわかっていない。ただし、暗黙のうちに、アクセントだけは、地理方言学では扱えなくて、比較方言学の領分だとされ、強いて避けられてきた。本当にそれでいいのだろうか。本当に地理方言学では、アクセントを扱えないのだろうか。しかし、それを確かめた論文はまだ存在しない。

筆者は、W. A. グロータース神父のように語群のアクセントを分布類型と比較してとらえるというやり方を、本来の地理方言学のやり方ではないと考える。すなわち、「蝸牛」「薬指」などの語彙を対象にする時と同じように、個々の語のアクセントを個々の分布毎に考察しなくてはならないと考える。神父は従来の日本のアクセントに対する人々の常識にとらわれすぎていたと思われる。語アクセントだからと言って常に体系的に処理しなくてはならないわけでもないであろう。筆者は、地理方言学の出発点に戻って、一語ごとにその分布を解明することが大切だと考え、それを丹念に実行している。

残念ながら、このように一語毎にアクセントの分布史を考察した本格的な研究が、まだ管見による限り日本では見いだせていない。

本考察の結果として言えることの一つは、「つるべ」などという廃れていく物は、現実社会の寄り所を求めて、別の語アクセント型へ転成することがあるということである。勿論、地理的な連続分布の理にも従って、変化してはいる。さらに3音節第2類の他の語と同様な頭高の型を取るということも考えなくてはならない。さまざまな要因が働いて、複雑な分布を形成しているのである。中部日本の方言は、日本の方言の中で最も解明の困難なものの一つであると言われている。そのことを実感できる一例である。

以下には、「つるべ」の言語地図をとりあげる。そして地理的な分布が音韻法則のとおりになっていないことを確認したいと思う。むしろ、それよりは、社会地理的な要因が強く作用して、現実の方言分布を動かし転成せしめていることを証明したいと考えている。

(2) 標準語化（共通語化）と異なるアクセントの変化の意味について

縄や竿の先につけて井戸の水を汲み上げる桶のことを「つるべ（釣瓶）」という。愛知県地方の少年層について方言調査をしていた昭和41年ごろには、まだ各家には、井戸があり、釣瓶が使用されていた。しかし平成元年（1989年）に再び少年層の調査をした時には、釣瓶を知らない子が大半であった。いちいち説明したり、絵を見せたりしたものである。ちょうどそのころに、テレビで有名な落語家に、笑福亭鶴瓶⁽¹⁾（しょうふくていつるべ）という人がいた。少年層者は「つるべ」という文字を見ただけで、笑いだした。彼らに

とって「つるべ」は「井戸の水を汲む桶」ではなくて、「人に笑いと娯楽をもたらす落語家」と認識されていた。彼らの誤解を訂正しつつ、アクセント調査を実施したが、余りにも膨大で全域的な「ツルベガ」（●○△）の分布を眺めるにつけて、同音牽引の影響をどれだけ排除できたかが鍵になりそうだと思われた。また、「ツルベガ」は近畿アクセントでもないし、東京方言アクセントでもない。この新しいアクセントが一瞬のうちに当該地域を覆って分布することになった原因について考えてみなくてはならないであろう。

釣瓶のアクセントが多様な分布を示すこと以外に、東京方言アクセントの「ツルベガ」という平板型アクセントが着実に西方へ向けて伝播し、いわゆる標準語化の状況を見せてもいるのであり、双方向の変化を見とることができる。

以上のように、中部日本におけるアクセントの分布は複雑である。その複雑な状況を解明するために、当該の釣瓶のアクセントは言語外の諸事態との関係を考慮しなくては正確な解釈が困難なものの一つと言える。標準語化（共通語化）とは異なるアクセント変化について、微細に考えてみたい。

一、中部日本言語地図「釣瓶が」の現代史

(一) 愛知県地方の老年層における「釣瓶が」のアクセント史

三重県地方の沿岸に、「ツルベガ」（●●○△）が分布する。「ツルベガ」（○●○△）も「ツルベガ」との共存から生まれたものであり、派生形である。双方が近傍にある。

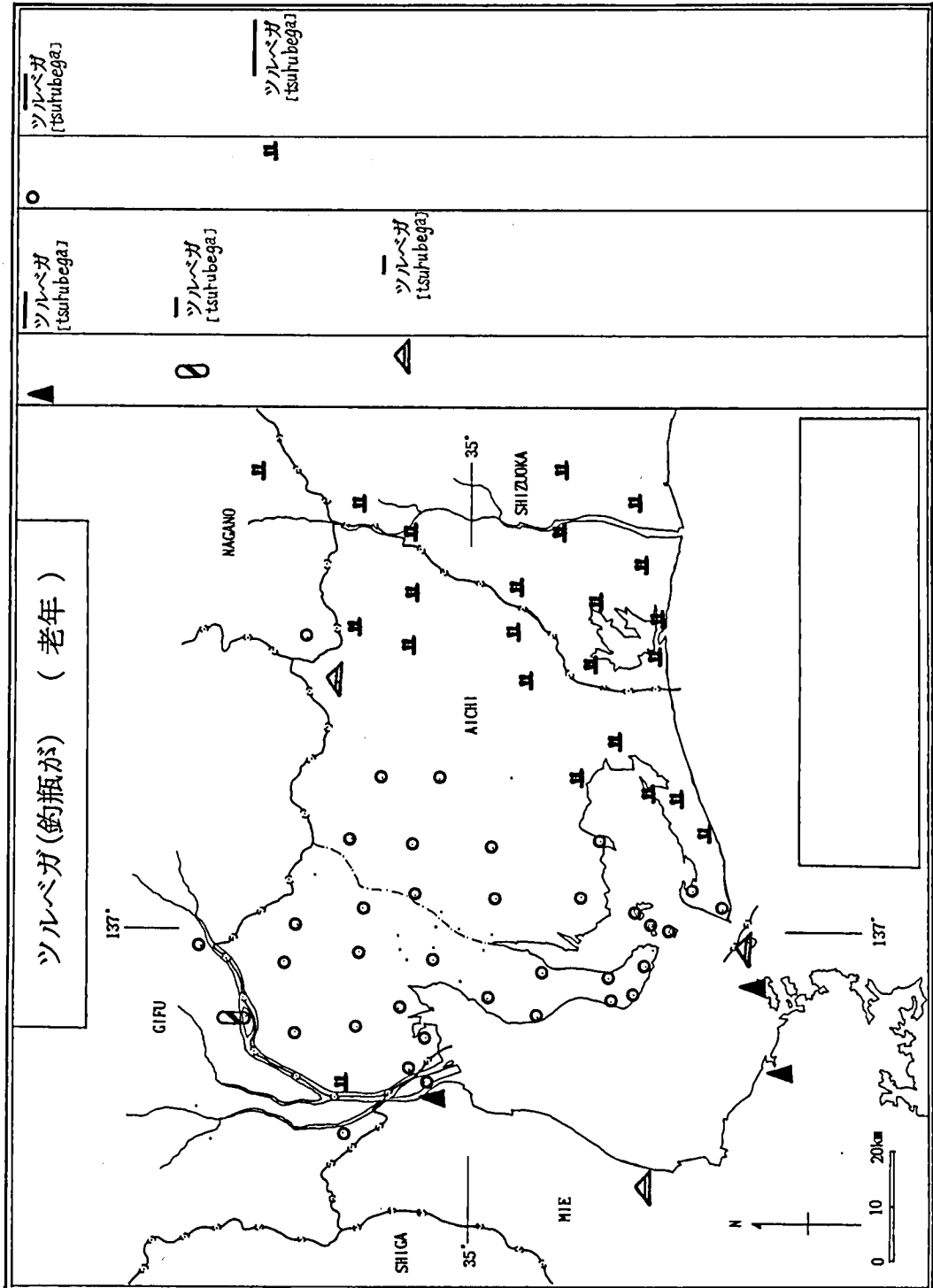
愛知県地方の尾張と西三河に、「ツルベガ」（○●●△）が分布する。きれいにまとまった分布であり、相当に古い分布だと考えられる。渥美半島の先端の伊良湖町には、他の渥美半島の方言と異なり、「ツルベガ」が分布して、特異である。ここは知多半島との関係が密接である。

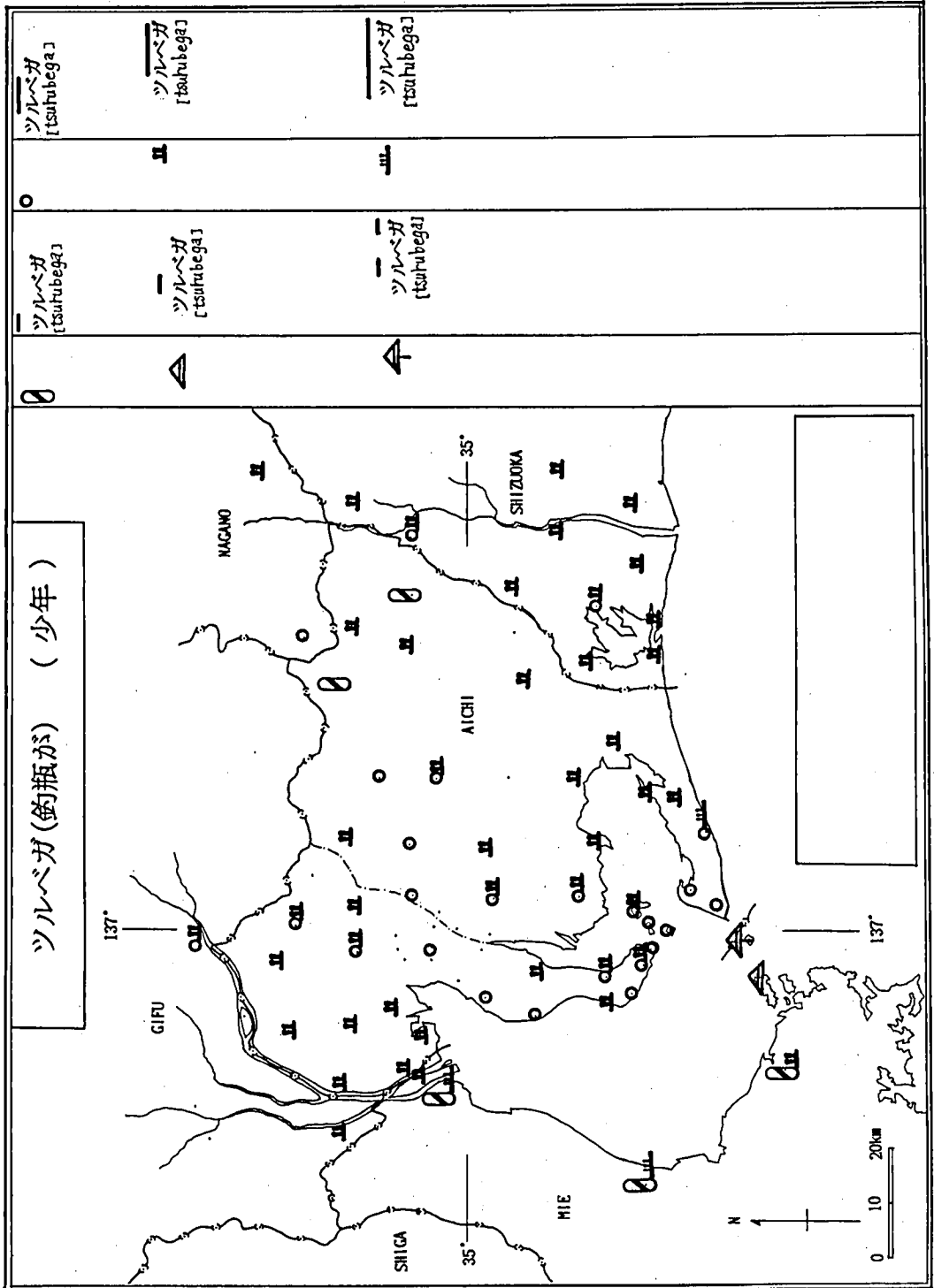
奥三河と遠江及び長野県には、平板型の「ツルベガ」（○●●▲）が分布している。これが東京方言のアクセントであり、最も新しく、かつ勢力のあるアクセントである。

たった1地点だけではあるが、岐阜県に「ツルベガ」（●○○△）が分布している。これは木曾川の中洲にできた岐阜県の飛地である。これは新しい変化のきっかけを示すものである。少年層への影響が甚大である。

(二) 愛知県地方の少年層における「つるべが（釣瓶が）」のアクセント史

最も古い形とみなした「ツルベガ」（●●○△）がなくなっている。少年層では、もはや、その型を維持できなくなった。その代わりに、現代京都方言のアクセン





とされている「ツルベガ」(○●○△)が答志島に分布し、「ツルベガ」(○●○▲)が神島に分布する。

次に三重県沿岸の3地点に、「ツルベガ」(●○○△)が分布し、さらに飛び離れて奥三河の2地点に「ツルベガ」(●○○△)が分布する。先の老年層では、岐阜県の1地点にしか存在しなかったのに、少年層では新しいアクセントとして西部から東部へと伝播しつつある。

愛知県の尾張と西三河に存在した「ツルベガ」(○●●△)は、著しく減った。尾張の平野部では、これが消えた。尾張平野部では東京方言アクセントの「ツルベガ」(○●●▲)を受け入れるのに懸命である。老年層で東三河・遠江にしか分布が認められなかった「ツルベガ」が、愛知県内の全ての地点を覆って分布している。

最後に、新しく少年層で発生した全高音型の「ツルベガ」(●●●▲)が、三重県の2地点と渥美半島の1地点に見える。この一見エネルギーが要りそうなアクセントが、難なく少年層で発生するとはどういうことだろうか。このアクセントは平板型とは共存しないので、近畿地方の独特のものである。特に「ツルベガ」が発生した地点に併せて「ツルベガ」を見うるので、相補的なニュアンスさえ感じさせる。しかし、これらの相関性についての考察は、別の機会にゆずる。

(三) 中部日本言語地図における老年層の「釣瓶が」のアクセント史

1976年当時、中部日本の各戸には、水道が普及していたが、地方都市や農村ではまだ井戸水が大切な役割をになっていた。どの地点の老年層も「つるべ」を知らない人はいなかった。

「つるべ(釣瓶)」は、「類聚名義抄」で、「上上平」(僧中17)のアクセント表記がなされて、3音節名詞第2類に分類されている。第2類の代表は「小豆」類である。「小豆」類であれば、平安末期から現代へのアクセント変化が「●●○」→「●○○」と推定されているものの、京都アクセントは「●○○」でなく「○●○」であるとされ⁽²⁾ている。近畿アクセントに多くの変異形があることはよく知られている。「小豆が」をもとにして平安末期のアクセントを推定すれば、「つるべが」は「ツルベガ」(●●○▲)であろう。しかし老年層図には、そのアクセントは見られない。近い形のアクセントを探せば、「ツルベガ」(●●○△)であろうか。この形なら、三重県の沿岸から岐阜県西部、福井県、石川県にまで縦に南北の分布がたどられ、かつまた、富山県中央にまで至る有意味な残存事態を見出しうる。「ツルベガ」→「ツルベガ」の変化過程を経て、近畿北陸地方に、かつての古いアクセントが遺存していると見てよからう。

次に現代京都の一般的なアクセント形とされる「ツ

ルベガ」が薄い分布ではあるけれども、当該地方にも見出せる。福井県南部や滋賀県にはこれが盛んである。また、北陸地方の先は新潟県であるが、そこにも「ツルベガ」が見え、長野県の1地にも分布の尖兵隊が至っているので、東の方へ伸びていこうとしていることがわかる。また第2類語の「間」が現代京都アクセントで「アイダガ」と発音するようであるが、この「釣瓶」も類似の「●●●△」をとる例があり、「ツルベガ」は石川県、福井県、滋賀県に分布している。「ツルベガ」は能登半島の珠洲市にもあり、近畿北陸のアクセントの特色を留めている。

さて、東京方言アクセントの「ツルベガ」(○●●▲)が東の方から西の方へと共通語化の名のとおり、押しよせてきている。富山県や岐阜県や愛知県、三重県、滋賀県、福井県には、東京方言アクセントの「ツルベガ」という平板型の分布がほとんど無いか、稀である。

中部日本の特色としては、おそらく「ツルベガ」(○●●△)のアクセントであろう。東京方言アクセントの「ツルベガ」に浸蝕されながらも、中部日本の全域に手堅く、尾高型のアクセントが見られる。

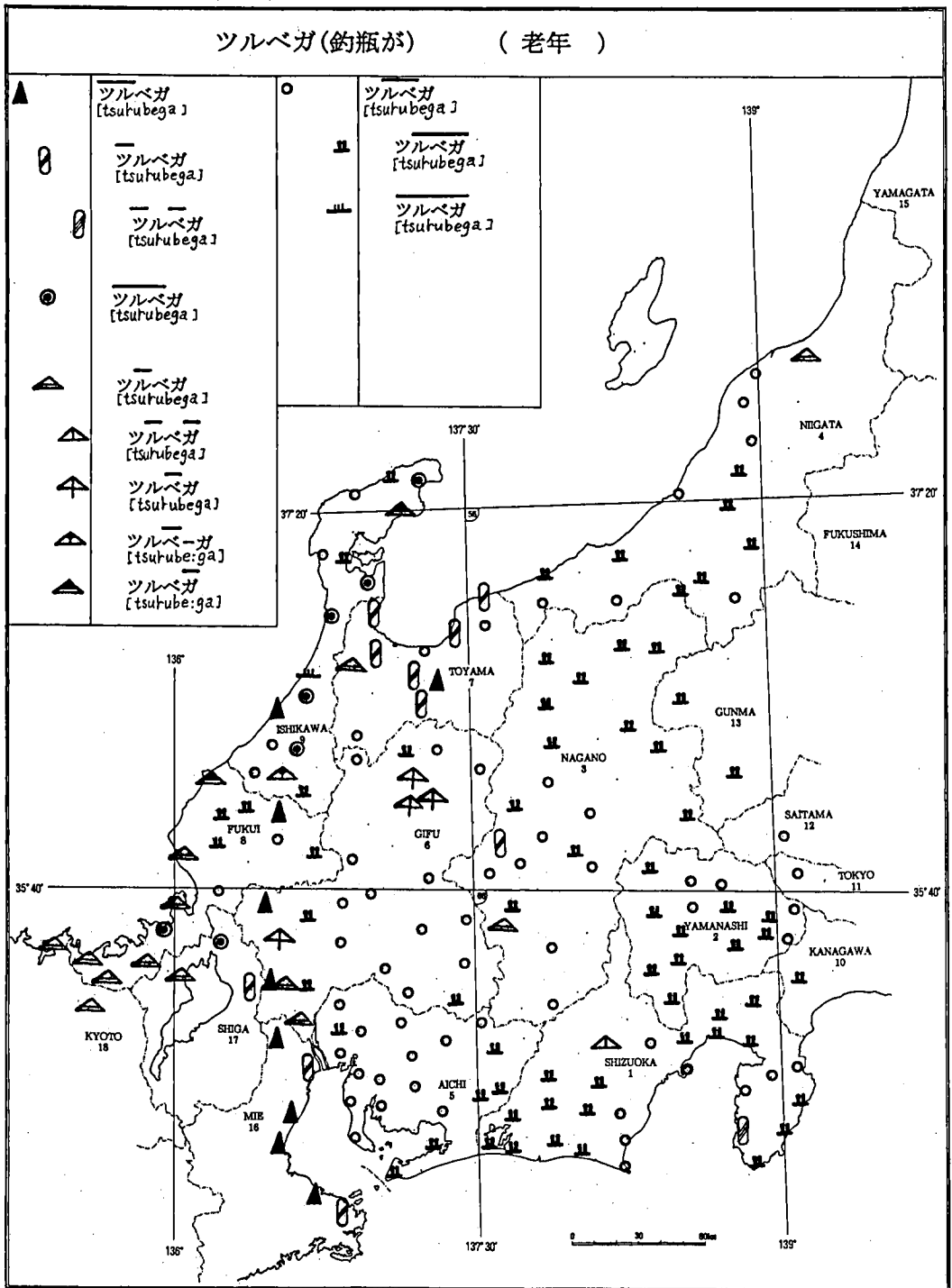
最後に注目したいのが、「ツルベガ」(●○○△)というアクセントである。この近畿色の感じられるアクセントが、富山県を発生源としてまとまった分布を示す。と同時に、三重県沿岸でも、「ツルベガ」→「ツルベガ」という変化を生んで、拡大しようとしている。これは新しい変化である。京都を発生地としなくても、主導権がとれることを示している。この場合は富山県とみてよいであろう。「ツルベガ」(●○○△)という頭高型は、東京方言アクセントの平板型や、中部日本地盤の尾高型とは全く違った新鮮さで、西から東へと伝播するきざしが見える。すでに長野県の木曾郡開田村にも「ツルベガ」が分布しており、辺境の地から始まる新しいアクセントという逆説的な事態がある。

(四) 中部日本言語地図における少年層の「釣瓶が」のアクセント史

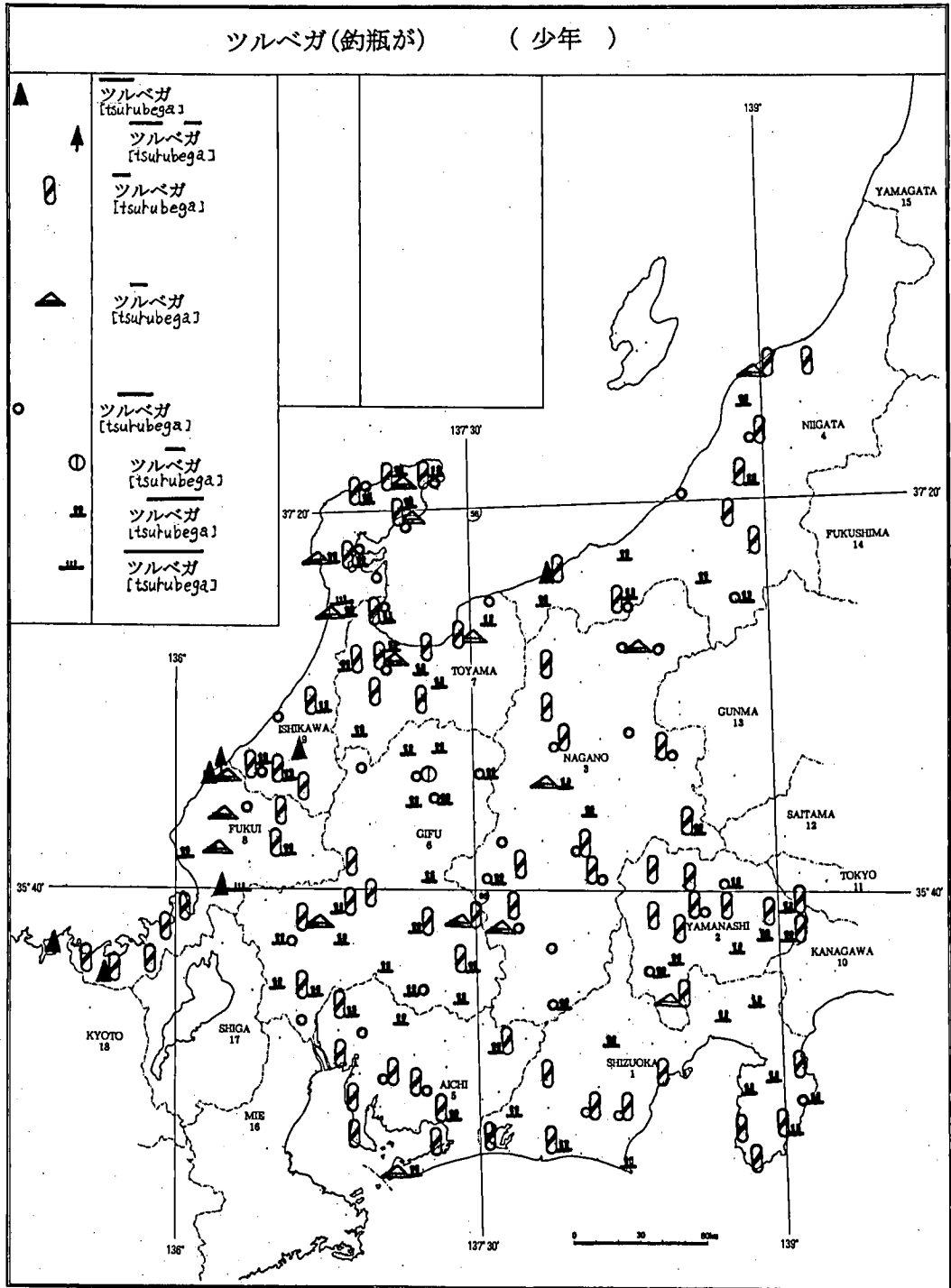
少年層では「ツルベガ」の分布は伸長せず、旧態を維持している。近畿色での古い形、「ツルベガ」(●●●△)は老年層で遺存の形で分布が北陸地方に見られたのに、少年層では消えた。京都アクセントの特色とされる「ツルベガ」(○●○△)は老年層において福井県その他に見られたが、少年層においてもさらに一層分布が拡大し、静岡県にはまだ受け入れられていないけれどもその他のどの県にも伝播している。西から東への動きである。

次に、最も大きな変化は、頭高型の「ツルベガ」(●○○△)が少年層において、近畿北陸中部の全ての地域で、爆発的な隆盛分布を見せている点である。老年層図

中部日本語地図 I (臨時調査)
A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN I (FIELD · WORK)



中部日本語地図 I (臨時調査)
A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN I (FIELD · WORK)



では、まだ富山県⁽³⁾と三重県、滋賀県、長野県開田村にしか、「ツルベガ」(●○○△)は分布していなかった。少年層の調査は1989年に開始した。老年層から13年後のことである。その間に西方から東方への著しい伝播があったのであろうか。しらみつぶしに伝播する「ツルベガ」の分布を見ていると、マスコミで流行語を普及させる現象と照らしあわせてみたくなる。先に、「つるべ(鶴瓶)」と言われる人気タレントが少年層の調査ではどこでも話題になったことを記述した。そのことと、「ツルベガ」(●○○△)との符合の有無について検討してみる必要を感じたのである。

ここでもう一つ厄介なことがある。それは少年層において、東京方言アクセントの「ツルベガ」(○●●▲)が、当該地域の全域に隈無く分布することになった点にも注目しなければならない。これは共通語化である。東から西への動きである。老年層では富山県や岐阜県や愛知県で、この平板型の受容に消極的であった。しかし少年層では、もうどこもかしこも、平板型を受容している。これは東京方言アクセントの勝利と言ってよい。

ところが中部日本も敗けてばかりではなかったのである。「ツルベガ」(●○○△)の急速な拡散伝播によって、当該地域全体の型がつくられた。したがって、先に保持していた「地域の型」としての「ツルベガ」(○●●△)をかりに捨てても、「ツルベガ」(●○○△)は取り込んでいるのである。土地によっては、欲ばりにも、古い「ツルベガ」(○●●△)と共にもう一つの「ツルベガ」(●○○△)を確保して安定した所もある。そして時流に乗るために、共通語のアクセントの「ツルベガ」(○●●▲)をも併せ持つという地点も珍しくない。

まさに、東からのものと西からのものが混ざり合い併存する戦略映画を見ているような感じがする。

二、諸学説への対応

「釣瓶(つるべ)」についてのきわだった学説に出会っていない。先にも自ら疑問を發したように、「ツルベガ」の急速な伝播がどんな理由によって可能であったのかが大きな課題である。

3音節名詞第2類の「つるべ」が不安定なアクセントしか取れないので、「命」や「小麦」のアクセント「●○○△」への「類推」で、「ツルベガ」になったのだ、と説明した方が人々の賛意を得られやすいとも考えたりしたが、やめた。すでに1976年の老年層図に、富山県や三重県、滋賀県で、「ツルベガ」がまとまった分布を示し、拡大の機会をうかがっている事実を無視するわけにはいかない。また、テレビタレントの「鶴瓶」の影響も無いわけではなかったであろう。偶然にも

「ツルベガ」を普及させる後押し効果は果たしたにちがいない。しかし、同音衝突にならずに、同音支援(推進)効果になったのであろう。この分布では、釣瓶をまちがえて、タレントの鶴瓶のアクセントで答えたというのがあったかどうか判別できない。ただし、釣瓶についての説明を受けた後に発音しているので、知識として釣瓶を認識した上で、頭高型の「ツルベガ」を回答していると心得ている。こういうときに、仮空のものについては頭高型にしやすいとの指摘を受けるときがある。しかしそれとは異なっている。なぜならば、「ツルベガ」は富山県や近畿地方に先に分布していたものであり、後にそれが中部日本全体に伝播したからである。

おわりに

「ツルベガ」(釣瓶)の頭高型アクセントが老年層において富山県や近畿地方で発生したのが1976年以前であった。それから10数年後、少年層者は中部日本の全ての地域で、そのアクセントを受け入れた。

上記のことと併せて、古来の伝統的なアクセント形も、また共通語のアクセント(「ツルベガ」)も、同時に許容している。異なるアクセントの併存状況を見るにつけ、語彙のような同音排斥は少ないのかと考えたりするが、これは後の課題とする。

最後に、W. A. グロータース神父は語アクセントを語類中心に分布処理をなさたけれども、筆者は個々の語毎に分布処理をすべきだと考えている。今後は、この方法での研究が進展することが期待される。

注

(1)笑福亭鶴瓶は落語家である。本名は駿河学、昭和26年生まれ、大阪出身。1980年代にはラジオやテレビで熱狂的なファンをうんだ。

(2)国語学会編「国語学大辞典」(東京堂出版、昭和55年9月)

(3)富山県のアクセントが他と異なって、「ツルベガ」である点は、すでに平山輝男編「全国アクセント辞典」(東京堂出版、昭和40年8月)の「全国アクセント比較表」で知られる。44頁。

参考文献

- W. A. グロータース「日本の方言地理学のために」1976年11月 平凡社
Reiner Hildebrandt "Probleme der Sprache" 1973
Walther Mitzka und Ludwig Erich Schmitt "Deutscher Wortatlas" 1962 Giessen